

平成29年度学校評価(年間評価)

学校名 大分県立大分豊府高等学校

前年度評価結果の概要	<p>1 世界標準の学力向上                  ①高3進学状況: 難関・最難関大学26名、国立大学170名合格。とりわけ思考力・判断力・表現力を問われる形式のAO入試や一般推薦では40名(合格率45%)が合格。                  ②授業改善: 2ヶ月に1回の校内授業研究会の実施や外部講師を招聘しての研修会の開催により、校内全体で言語活動を意識した授業の推進やICTの活用が当初の計画以上に達成できている。                  → 継続した授業改善研究を行い、中高での授業研究会の推進や評価問題の開発が必要。</p> <p>2 世界標準の人間力向上                  ①生徒会が中心となって各種行事を運営している。全校集会時、集団の規模が大きいので教師の指導が中心となっていたが、生徒会が主導するようになった。                  ②学校生活アンケートにより生徒の状況把握が進み、学校生活に課題のある生徒等の早期発見・早期対応ができるようになった。重篤ないじめ事案はない。</p> <p>3 業務の精選、効率化・平準化                  ①運営委員会見直しによる中高別及び中高合同の企画会議で、ミドルリーダーを中心に中高一貫教育の課題や次年度の重点的な取組計画ができています。更なる中高の連携が重要。                  ②いくつかの領域ではミドルアップダウン体制が定着しつつあるが、領域主任が職員に回らず自分で仕事を抱え込む場合がある。                  ③ICT活用は計画を上回って達成。OENシステム活用・統合ファイルサーバの再構築が完了。今年度より効果的な活用(文書の共有・活用等)ができてきた。</p>
------------	---

学校教育目標	中期目標	重点目標
創造的な知性と豊かな人間性、逞しさを備え、高い志を持って国際社会でリーダーとして活躍できる人材を育てる。	<p>1 中高一貫教育の特色を活かして中学・高校の全教職員が協働して、6年間・3年間で生徒を育成する教育指導システムを確立する                  (1) 中高一貫教育の特色を活かした世界標準の学力を育成する指導システムの確立                  (中高一貫した教科指導、思考力・判断力・表現力を育成する授業実践、生徒が自主的に学ぶシステム構築)                  (2) 中高一貫教育の特色を活かした世界標準の人間力を育成する教育システムの確立                  (生徒の自己・他者理解を深め、広い視野で物事を判断できる資質を育成する特別活動や人権教育等)                  (3) 生きる力を育む進路指導システムの体系化を図るとともに、夢を叶える進学力を向上させる組織的対応システムの確立(中高一貫した進路指導体制、海外の生徒との交流、系コース選択指導の充実)                  (4) 安心して学べる環境づくり、信頼される学校づくりを推進する。                  2 中高一貫教育の特色を活かして中学・高校の全教職員が協働して、正確、迅速、効率的に業務を遂行できる学校経営体制を確立する                  (中高協働した業務システム構築、統合FS・OENシステムの活用)</p>	<p>1 中高一貫教育の特色を活かした世界標準の学力向上                  2 中高一貫教育の特色を活かした世界標準の人間力向上                  3 業務の精選、効率化・平準化</p>

重点目標	達成(成果)指標	重点的取組	取組指標	PL SL	自己評価結果		次年度の改善策	学校関係者評価	
					評価	分析・考察			
1 中高一貫教育の特色を活かした世界標準の学力向上(授業改善)	生徒の授業満足度85%以上(生徒授業アンケート) JETテストで評価4以上(5段階)の生徒割合が60%以上	育成を目指す資質・能力を踏まえた教科・科目の目標や指導内容の見直し 主体的・対話的で深い学びの視点から、学習過程の改善	生徒授業アンケート年3回実施	教科統括 教科	3	3	年間3回の授業アンケートを実施。第3回目授業アンケートでは、生徒の満足度92%で目標を達成できた。	授業アンケートの結果の分析を教科内で共有し、改善すべき点を整理して、授業改善につなげる。	妥当である
	※JETテストとは、Judgement(判断力)+Expression(表現力)+ability to Think(思考力)と表し、思考力・判断力・表現力に特化したものや合教科的なテストである	評価規準(ルーブリック等)見直し、観点別評価の見直し	中高合同でJETテスト(2回)の開発 評価規準に基づく観点別評価システムの継続的な改善(毎学期実施)	教科統括 教務			観点別評価も3年目になり定着、1・2学期末の成績発送時に観点別評価を全保護者宛送付した。JETテストについては、次年度実施に向け作問のあり方を各教科で議論し、年度末までに中2～高3までの問題作成と出題のねらいを完成させる予定である。	シラバスとルーブリックは、さらに使いやすいものにするための議論を継続していく。JETテストについては、次年度実施予定。結果分析を授業改善につなげると共に、さらに妥当性・信頼性の高いアセスメントテストになるよう改善する。	妥当である
	「授業に自ら参加」「授業で自ら考える」生徒80%割以上(言語活動等生徒アンケート)	言語活動の充実・アクティブラーニング型授業の実践(幅広い学力層に応じた授業および課題等を運動させた指導体制確立)	全教科において効果的に言語活動を取り入れた授業の実施 2月に1回程度の中高合同授業研究会、授業改善研修会を2回実施	教科統括 教務			1学期、はじめて中高合同で授業研究会を実施。ICTの効果的活用をテーマに「主体的・対話的で深い学び」について、全職員で議論することができた。 2学期には、各教科の研究テーマに基づいて授業研究会を2回実施(1回は公開)した。また、授業改善研修会は職員会議後の実施分を含め10回実施した。 「授業に自ら参加」188%、「授業で自ら考える」194%であった。	今年度3回実施した中高合同授業研究会の中で出された意見や共有できたことを、今後の授業改善や次年度の授業研究会につなげている。 授業改善研修は、授業実践に有用な内容を厳選し、実施していく。	妥当である
2 中高一貫教育の特色を活かした世界標準の人間力向上	安心して学校生活が送れていると回答する割合80%以上(学校生活アンケート)	学校生活アンケート等による早期発見・早期対応	いじめ調査年2回、学校生活アンケート年3回実施	指導 学年	3	3	学校生活アンケートを年3回(6月・10月・2月)、いじめアンケートを年2回(7月・12月)に実施し、いじめに関する情報の早期発見・早期対応に努めた。アンケート実施後、管理職及び関係職員と会議をもち、対応について協議を実施。いじめに関する案件はなく、困りのある生徒の支援について話し合った。また、管理職も交えた教育相談会議も実施した。	次年度も、引き続き早期発見・早期対応に努める体勢を継続する。教育相談会議及び職員研修等の充実を図り、生徒支援に努める。	妥当である アンケート結果について数値等公表できるものはしてほしい
	あったかハート123(県指定)の完全実施	3日連続欠席生徒の支援カード作成、情報共有	指導 相談 学年	昨年度と同様に、毎週教育相談会議が各学年主任・管理職出席で行われ情報共有ができた。スクールカウンセラーとの連携もよくできている。3日連続欠席生徒の支援カードを作成し、長期欠席の生徒数も減少した。			次年度も、教育健康相談分掌を中心に各学年会議等で支援カードの継続的作成を促し、教員間での情報共有と生徒支援に取り組む。	妥当である	
	計画的・継続的な個人面談の実施	年3回、全校一斉に個人面談を実施する面談週間を設定・実施。あわせてこの時間を自学タイムとし、自学力を向上させる	進路 学年	1・2学年は、系コース選択指導や模試成績分析会を通じ、学習への取組み等について協議。幅広い学力層の生徒に対し、生徒把握に努め、生徒自身に気付きを与える進路指導を行った。3学年は、三者面談を含め、年6回以上の面談を実施して、学力や適性をふまえた進路指導を行った。			幅広い学力層の実態や学習習慣の定着状況をふまえて、系コースに応じた個人面談のあり方を検討・実施する。	妥当である コース選択や大学入試の方法について、説明時間の確保をお願いしたい。	
	清掃時間にすぐに始め、清掃活動の徹底	毎日、掃除区域で清掃を指導	生徒指導 学年	領域主任と生徒指導主任で、清掃区域の巡回指導に努めることができた。しかし、2学期以降は時間的な余裕がなく、毎日の実施はできなかった。清掃監督の指導の下、生徒は時間いっぱい取り組むことができた。			引き続き清掃時間中の巡回指導を行い、窓の棧など目に付きにくい場所の清掃指導を行うとともに、トイレの清掃に重点をおいて取り組んでいく。	妥当である	
3 業務の精選、効率化・平準化	「中高の連携ができています」職員8割以上(職員アンケート)	中高別企画会議、中高合同企画会議の役割の明確化と活用	原則としてそれぞれ月1回実施	管理職 企画運営 委員会	3	3	中高の連携ができていますと答えた職員は77%。今年度は、中高合同企画会議を8回実施し、中高6年間を見通した教育課程の編成等について議論が深まった。特別活動の行事調整も円滑にでき、生徒間にも中高一体感が強くなっている。	中高連携の意識向上を更に進めて、メリットを検討し、豊府高校の強みを増やしていく。学校経営に積極的に参画するミドルリーダーを育成する。	妥当である
	「業務が効率的に遂行されている」職員8割以上(職員アンケート)	領域制度の徹底(領域主任による進行管理、係長による企画運営)	年度初めに分掌経営計画・分掌業務計画作成、学期毎に自己評価	管理職 企画運営 委員会			5つの領域が、それぞれに主任を中心として機能していた。分掌間及び分掌と各学年との連携では、情報伝達において不十分な面が時折見られた。業務が効率的に遂行されていると答えた職員は82%	事前の職員間の情報共有をしっかりと行い、分掌間連携を強化することによって、円滑な学校行事の運営に取り組む。	妥当である
	ICT活用力の向上(統合ファイルサーバ活用、Webアンケート・OEN活用、e-office利用徹底)	統合ファイルサーバ内文書等の活用推進 紙ベースアンケートO、OENメール・ドライブ・e-office毎日確認の徹底	教務(情) 教頭	朝礼伝達及び教員アンケートは全てwebで実施した。授業中のタブレット使用率も向上し、生徒の興味関心を喚起する授業が展開されつつある。			情報化推進リーダーを中心に、今年度以上にタブレット活用方法の充実を図る。	妥当である	

総合評価 次年度への展望	<p>1 世界標準の学力向上 生徒の主体的な学習活動を引き出すための発問の工夫や興味・関心を喚起するためのICT機器の活用により、授業改善の取り組みが推進した。生徒の満足度を維持しつつ、更に内容の濃い授業展開を模索していく。 アセスメントテスト(JETテスト)実施とその分析を行い、各教科の取り組みと成果を検証していく。</p> <p>2 世界標準の人間力向上 生徒間の人間関係のトラブルが、いじめにつながらないよう対応できた。他者理解する機会を授業や特別活動の中で更に充実していく。生徒支援の効果で、不登校傾向の生徒も減少している。取り組みの継続と支援策の工夫・実施を検討する。</p> <p>3 業務の精選、効率化・平準化 中高合同の企画会議・分掌会議・教科会議を実施したことで、中高一貫教育校としての特色を職員が意識し始めた。効果的な取り組みの企画・実施について、次年度も継続していく。</p>
-----------------	--